

THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2016年6月1日発行

発行者 本多弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0034 東京都文京区湯島2-19-11

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

Facebook <http://facebook.com/shinran-bc>

2016.6

第57号

現代生活の罪業性と法蔵願心

親鸞仏教センター所長 本多 弘之

凡夫であるわれらの日常意識にとって、宗教的主体として教えられる法蔵菩薩は、どういう場合に感覚することができるのであろうか。親鸞の教示は、徹底的に衆生は「愚悪」であり「罪障深き存在」であると言う。その自覚に立つなら、日常のなかに「好日」を感じたり、喫茶喫飯きつさ きつばんに直接仏道が現前するということは、自己の凡夫性を忘れることでしかない。

しかしそれにもかかわらず、その凡夫であることと離れずに、十方衆生に大悲がはたらいていることを信ぜよと教えられている。仏陀の根本の見方は、存在は因縁で成り立っているが、それに自我の執着が付帯して、今生きてあることを無明の黒闇で覆って、存在の本来性が見えていないとする。その無明の暗さを生きることには、親鸞の言う罪障性や自力の執心が付着している、それを突き抜けてはたらく法蔵願心を気づけ、ということなのであろう。

この凡夫の存在構造に加えて、現代には文明社会の生きづらさという課題が乗っている。文明の利器に取り巻かれて、生活のための労力は圧倒的に減少し、便利で気楽な生活が大多数の生活者に確保されたようではあったが、一方で公害やゴミ

問題、さらにはエネルギー多消費による地球温暖化などという、引き返すことが困難な課題が続々と噴出してきて、まさに五濁悪世が増幅する事態になっているのである。

このような地球環境の破壊の事実を前に、個人的な精神的満足を現在完了の形で表現して、すでに救済されているなどと喜んでいるのは、歴史的な事実たる生命存在の危機的事態を見て見ぬ振りをしていることになるのではないか。こういう人間業が生み出してくる罪障性の社会的苦難に、悲しみと慚愧ざんき いだを懐きつつ、宗教的な救済を求めることは、どのように可能なのであろうか。

諸仏の護念証しよじよ誠まことは悲願成就のゆえであるという。諸仏の護念にあ遇うことは、深く罪業を傷むことと無明の闇を担うことを自己自身とする法蔵願心にちくごう値遇することなのではないか。仏道との値遇は、罪障性を忘れた即自的存在肯定であってはならない。現在進行形の罪業の事実と平行する現在進行形の救済表現こそが、現代の宗教的自覚でなければならないのではないか。それは、凡夫の黒闇を引き受け、煩惱の身の痛みを担ういんに因位法蔵菩薩の永劫の悲しみを感じることなのではないか。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③⑥

名が行となるということ

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第88回から第90回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第88回では第十七願成就文について、第89回と第90回では第十八願成就文について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第86回から一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

■本願が行となる

「諸仏称名の願」と呼ばれる第十七願に「十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、我が名を称せずんば、正覚を取らじ」（『真宗聖典』18頁、東本願寺出版、以下『聖典』）とあって、名を通して願いを与えたい、十方衆生を平等に救いたいという願いをもった名なのだ。こういう意味で、諸仏に名を咨嗟して、讃めてほしいと。諸仏が讃めてくれなければ自分は覚りを開かないと。この願が成就して、「十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功德の不可思議なることを讃歎したまう」（『聖典』44頁）と、こういう言葉になってきています。

親鸞にとっての真実行とは、諸仏が称名している、諸仏が讃めているということが行であるのです。行は念仏の行、「南無阿弥陀仏」が行であるわけですが、「南無阿弥陀仏」が行であるとは、十方恒沙の諸仏如来が讃めているというはたらきなのだ。名号の意味は、「諸仏称名の願」が行じてい

る。名が行となっている。その場合の行は、本願が行となっている。これはわかりがたいですね。

親鸞にとっての名は単なる名でなくて、選択本願が名をもって衆生に呼びかけようとしている、その名前自身が本願のはたらきなのだ。普通、名前は名詞、固有名詞であって、固有名詞は行ではないです。人間にとっての行とは、人間が努力して何かをする、人間が一つの行為をする、そういうことが行と言われる。ところが、諸仏如来が讃めていることが行だとは、名前が称えられるということは、十七願がそこに起こっているということだと。現実には、誰かが名を信じて発音するのもかも知れないけれども、そのことは、法蔵菩薩の本願が、阿弥陀の願いに賛同して讃めるということが、ここに起こっているという事実なのだ。一つの名前があるということが、十方恒沙の諸仏如来が讃めるという事実の現れなのだ。

これは「諸仏称名の願」ですから、凡夫称名ではないのです。だれが称えようと、どこで称えられようと、阿弥陀の名が称えられるということは、諸仏称名の願がそこに成就してきているという意味をもつということです。

■讃める人のところに阿弥陀が現れる

諸仏称名の「諸仏」とは何だろうということはよくわからないのですが、仏法を求め、仏法に出会い、仏法を語り伝えた方々の歴史が現代にまできている。そうした、自分が仏法を信じていける縁を残していただく方々は、私どもにとってはみな諸仏であると私は思うのです。阿弥陀

親鸞仏教センターの動き

(2016年2月～4月) 一抄出—

陀如来自身が諸仏によって讃められたいと。諸仏によって讃められてこそ阿弥陀が阿弥陀に成る。阿弥陀を讃めるところに諸仏のはたらきが起るわけです。仏法が起るわけです。十方恒沙の諸仏如来がみな讃めているということを手がかりにして親鸞聖人は『教行信証』の「行巻」をお作りになるわけですが、そこで經典の言葉を置いた後、龍樹から始まって、歴史上、念仏を讃めてきた文章をずっと並べられるのです。これはつまり諸仏如来の伝承です。

凡夫ですから、自分が諸仏だというふうには言えない。自分が諸仏だとは言えないけれども、仰ぐ側は念仏を伝えてくださる方を諸仏だと仰ぐことはできるわけです。信ずる人は凡夫なのだけれども、凡夫が信じてそのことを伝えてくると、それを聞いた人に念仏が伝われば、聞いた人間にとっては、伝えてくださっている方々は仏の仕事をしてくださっている、諸仏如来だというように仰ぐことはできる。信じたことを、このように信じたと伝えてくださって、それがまた人に伝わるという力をもったときには、伝えられた側は、伝えてくださった言葉や、そうした人たちを諸仏と仰ぐわけです。これが仏法の歴史、諸仏の歴史なのです。これは実体的に考えるのではないのです。象徴的に考える。そうすると、この十七願の意味が少しくわかってくるのではないかと思うのです。

そして、「南無阿弥陀仏」と称える人々のはたらきが阿弥陀を生み出すわけです。阿弥陀がどこにいるかといったら、讃める人のところに阿弥陀が現れるわけです。讃めるところに阿弥陀が成就するわけです。不思議な話ですね。人間が念じないのにどこかに阿弥陀がいるという話ではないのです。阿弥陀は衆生を救いたいという願ですから、私のための本願でありました、「南無阿弥陀仏」と言うところに、阿弥陀が現れるわけです。これが第十七願成就ということではないかと思えます。

(文責：親鸞仏教センター)

■ 2016年

- 2/3 第51回現代と親鸞の研究会「イスラームとその世界—私たちが知っておくべきこと」同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授：内藤正典氏（中央区・AP 東京八重洲通り）
- 2/4 第34回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
- 2/5 第11回研究員と読む公開輪読会「大悲の驚歎—善導『観経疏』を読む—」担当：中村研究員①2/5②2/12③2/19④2/26（文京区・東京大学仏教青年会会館）
- 2/12 ご命日のつどい
- 2/15 第89回（通算第140回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 2/16 第22回『西方指南抄』研究会
- 2/17 第184回英訳『教行信証』研究会
- 2/19 第162回清沢満之研究会
- 3/4 第23回『西方指南抄』研究会
- 3/7 『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会「対偽対仮」という営み—「顕浄土方便化身土文類」の課題—大谷大学文学部教授：加来雄之（千代田区・東京国際フォーラム）
- 3/10 第35回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会第90回（通算第141回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 3/11 ご命日のつどい
- 3/17 第2回清沢満之研究交流会（清沢満之から問われるもの—異領域間の「対話」は可能か？）「方法としての〈清沢満之〉の可能性—「悪」と近代への問い」明星学園教諭・早稲田大学現代政治経済研究所：繁田真爾氏、「清沢再誕—その歴史的意味」真宗大谷派教学研究員：名畑直日兄、「今村仁司の清沢満之論と「宗教哲学」の課題」愛媛大学准教授：杉本耕一、大阪教育大学教授：岩田文昭〈コメンテーター〉、親鸞仏教センター研究員：名和達宣〈司会〉（文京区・求道会館）
- 3/22 第7回センター会議（京都）
- 3/29 第163回清沢満之研究会
- 3/30 第185回英訳『教行信証』研究会
- 4/6 第24回『西方指南抄』研究会
- 4/8 ご命日のつどい
親鸞仏教センター新施設竣工式
- 4/15 第164回清沢満之研究会
- 4/18 第13回「親鸞仏教センターのつどい」記念講演「称名念仏と浄土—現代の思想的課題からの照射—」東京大学大学院人文社会系研究科教授：下田正弘、「深層意識の自覚化」親鸞仏教センター所長：本多弘之（千代田区・学士会館）
- 4/19 第186回英訳『教行信証』研究会
- 4/27 親鸞仏教センター移転開所式

本研究会では、「現代とは何か」をテーマに、さまざまな分野でご活躍されている方々から、専門分野での課題とその苦闘を問題提起いただき、時代の課題と親鸞の思想・信念との接点を探っています。

第51回

イスラームとその世界

— 私たちが知っておくべきこと —

同志社大学大学院
グローバル・スタディーズ研究科教授

内藤 正典 氏



研究会の様子

現代の世界情勢を知るうえでイスラム教、また、イスラム世界の研究や理解は不可欠である。

親鸞仏教センターでは2016年2月3日に「現代と親鸞の研究会」の講師として内藤正典氏をお呼びした。内藤氏は現在、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授であり、中東問題の第一人者である。当日は「イスラームとその世界 私たちが知っておくべきこと」という講題のもと、講義をいただいた。以下にその抄録をお届けする。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 田村晃徳)

■「信徒ではない」ことの意味

まず、はじめにお断りしておくのは、私はイスラム教の信徒ではないということです。ですから私が話すのはイスラム教の社会の話、あるいは地域の話です。もちろん、イスラム教についても間違いない範囲で言及いたします。しかし、イスラム教の信徒であるかないかによって、もの見方が大きく違うということ。このことをまずご理解いただきたいのです。例えば、ジハードで自分が敵だと思った者を殺していいか、となればイスラム教徒のイスラム学者であれば「それはあり得る。コーランに書いてあるから」と答えます。しかし、私はイスラム教徒ではありませんので「信仰の敵であるから、殺していいとはならない」と答えるわけです。

■スンニ派とシーア派

イスラム教徒は世界中に住んでいます。イスラム教にはスンニ派とシーア派がありますが9割はスンニ派です。シーア派はイランに多いのです

が、イスラム教徒の1割位です。両者は何が違うのか。ごく簡単に言えば先にできたのがシーア派であることは覚えてください。イスラム教を創始したのは預言者ムハンマドです。そして、ムハンマドの娘婿にあたるアリーという方がいました。シーア派というのはアリーのことをとても慕った方々なのです。現代の言葉で言えばアリーのフォロワーであります。そのフォロワーにあたる言葉が「シーア」なのです。スンニ派の教義ができあがるのは、もう少し後になります。スンニ派の人達から見れば、ことのほかアリーのみを愛するシーア派の人達は奇異に見えたはずですが、だからといって異教徒の神を信じているわけではありませんから、皆殺しにせよとはならないわけです。

IS (Islamic State イスラム国) は、このシーア派を皆殺しにしまえと言っているのです。今までにいろいろ過激な集団はでてきましたが、そこまで公言する組織はありませんでした。なぜかと言えば、シーア派は異端だからということなのです。ISは周りのイスラム教徒を異端だと決めつけては処刑しようとしています。これが強硬な点ですね。そのような基本的な事項を覚えておいてください。

■シリアからの難民

現在のドイツ、フランス、オランダなどヨーロッパ国の先進国にはイスラム教徒の移民の人たちがいます。彼らがヨーロッパに入ったのは1960年ごろからです。昨年からは膨大なシリアからの難民の流入によって「ヨーロッパがイスラム教徒と

向き合わなければならなくなった」という報道がされていますが、誤りです。半世紀も前からイスラム教徒はいたのです。このような点をジャーナリストたちは誤解しているのです。このシリアからの難民の問題が起こる前から、はっきりした数はわかりませんがドイツ、フランス共に480万人ほどのイスラム教徒が住んでいたとされています。つまり、ヨーロッパではすでにイスラム教が第二の宗教になっていたのです。

■アサド政権からの逃避

誤解の一例をあげましょう。ヨーロッパジャーナリストが「難民はISから逃れてきたのだから受け入れなければならない」と言います。これは誤りです。なぜならばシリアからヨーロッパに入った難民のほとんどはISから逃れてきたのではなく、彼らはアサド政権の攻撃から逃れてきたのです。安倍総理もそのように言っていますが誤りです。2014年はじめにはUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）は、正確には数えられないがシリアからの難民が300万人に達するだろうとしていました。しかし、2014年の初めにISはいないのです。ISが登場するのは2014年の6月以降のことです。ですからアサド政権側の空軍などによる反体制側への^{かれつ}苛烈な攻撃から逃れてきたのです。

■旅人には優しく

オスマン帝国の時代には、ユダヤ教徒やキリスト教徒も住んでいました。しかし、迫害はしませんでした。税金を徴収したのです。そのかわり共存していったのです。つまり「不平等下の共存」です。そのように異教徒とも共存していたのです。

現在、トルコ一國で難民が250万人くらいいます。しかし、排斥運動は起こっていません。シリアから彼らが来たという因果関係はもちろんわかっています。しかし、原因が何であろうと彼らは客なのです。客に向かって帰れとは言えないわけですね。トルコは難民とは見ないのです。ドイツやデンマークなどと違って排斥しない。それはイスラム教徒に国境の考えがないからなのです。国家に所属するという観念がないのです。

コーランのなかに「旅人は弱者であるから優しくしなさい」と書いてあります。神の絶対命令なのです。そこには従わなければならないのです。

人が亡くなったときもいつまでも悲しんでいてはいけないと教えます。誰かが亡くなると「これで天国に行けた。よかった」と皆が言い出すのです。そうすると、だんだん遺族も「よかったのかな」と思えてくるのです。お葬式のために「亡くなった人に対する「貸し」を放棄しますか」、と聞かれるのです。そうすると「放棄する」と答えるのです。これは最後の審判のときに、その人に罪が残らないようにするという思いからだそうです。

※内藤氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第34号（2016年12月1日号）に掲載予定です。



内藤 正典（ないとう まさのり）氏

同志社大学大学院

グローバル・スタディーズ研究科教授

1956年東京生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程中退後、東京大学教養学部助手、一橋大学大学院社会学研究科教授などを経て現在、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授、研究科長。専門は、現代イスラーム地域研究、移民研究、中東の国際関係論。

著書に、『トルコのものさし 日本のものさし』（筑摩書房、1994年）、『ヨーロッパとイスラーム—共生は可能か』（岩波書店、2004年）、『イスラーム戦争の時代—暴力の連鎖をどう解くか』（日本放送出版協会、2006年）、『イスラームの怒り』（集英社、2009年）、『イスラーム—癒しの知恵』（集英社、2011年）、『イスラームから世界を見る』（筑摩書房、2012年）、『イスラーム戦争—中東崩壊と欧米の敗北』（集英社、2015年）、『トルコ—中東情勢のカギをにぎる国』（集英社、2016年）、『イスラームとの講和—文明の共存をめざして』（集英社、2016年）、『欧州・トルコ思索紀行』（人文書院、2016年）、など多数。

「対偽対仮」という営み

—「顕浄土方便化身土文類」の課題—

元親鸞仏教センター研究員 藤原 智



加来雄之 氏

2016年3月7日、東京国際フォーラム（有楽町）において、大谷大学文学部教授である加来雄之氏をお招きし、「対偽対仮」という営み—「顕浄土方便化身土文類」の課題—というテーマで、『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会を開催した。『教行信証』全6巻のなかで、最後の「化身土巻」が担う課題とは何であるのか。親鸞の「真の言は偽に対し、仮に対するなり」という言葉を手がかりにお話しいただいた。ここにその研究会の一部を紹介する。

■『教行信証』における「仏身仏土」

「信巻」に善導の「真仏弟子」という言葉を解釈する「真の言は偽に対し、仮に対するなり」（『真宗聖典』245頁）という親鸞聖人の言葉があります。仏弟子として偽に対し仮に対すとは、一体どのような具体的な事実なのか。そのことを説き明かそうとするのが「化身土巻」である、このように言っていると思います。

少し思い切ったかたちで、「真言」という言葉を「真仏土巻」に当ててみます。私は「真仏土巻」のもつ意味が、「化身土巻」を考えていくときに、非常に大きな視点を与えてくれるものだと思っています。つまり、真仏土という世界はどういう世界か。それはどこまでも自分の光明・寿命が包めないものがあるならば、私は本当の覚りを得ることはできない。どこまでも迷いの衆生というものに、言葉となって関わっていかうとする、そういう精神そのものが「真仏土巻」に表わされています。そしてそのような世界が、衆生の具体的な苦しみや悩みを縁としてはたらいてくる、その道理を私たちに示しているのが「化身土巻」であろう。こういう大まかな押さえ方をしています。

では、「仮」と「偽」とは一体何なのか。「仮」という問題は教えを聞く私たち人間の在り方とい

加来 雄之（かく たけし）氏 大谷大学文学部教授

1955年京都府生まれ。1978年大谷大学文学部仏教学科卒業、1984年同大学大学院文学研究科博士後期課程真宗学専攻満期退学。2010年より大谷大学文学部教授。専門は真宗学。

著書に、『大無量寿経』の讃歌と問答—曇鸞撰『讚阿弥陀仏偈并論』を読む—（東本願寺出版）など。論文に、「入願海—方便化身土を開顕する意義」（『真宗研究』第56輯）など多数。

また、2011年2月18日に「清沢満之研究会」にご出講いただき、「清沢満之と宗教言説—自足と修養—」をテーマにご講義いただいた。その詳細は『現代と親鸞』第23号に収録されている。

う問題です。それに対して「偽」は思想性的の問題です。この「対偽対仮」という課題は、二つの問題が並列してあるのではなく、一つの課題というものを果たし遂げていくために重層的な表現をとっています。真の仏弟子とは、この仮・偽という問題を自らの問題として深く受け止めていくという存在が押さえられています。

その「対偽対仮」がどうして「仏身仏土」として語られねばならなかったのか。つまり、浄土とは一体何ぞや。浄土というものは、如来が私たちを包む世界を表わし、その世界にどのようにして出遇うのか、そういう問題が表現されています。仏身仏土というものは、どこまでも如来がわれわれを摂化するそのはたらきというものを表わしている、この一点を決して崩さない。「化身土巻」は、方便悲願が教えとなって、教えのはたらきとして如来が私たちの仮・偽なる在り方にどこまでも関わってくるのだということです。そして如来のはたらきのなかにきちんと自分というものを位置付けていきます。

「化身土巻」というものが見つめている現実とは、濁世・穢悪と示される私たちが、仏教に出遇いながらどうして仏道を生きていくことができないの

か、という課題です。そういう在り方を問い直すということが、「化身土巻」に引かれているさまざまな教えのはたらきだと思います。その如来のはたらきのなかにある自己、有限なる私というものをどのように回復していくのか。つまり、私たちが生きているこの濁世において、如来のはたらきというものをどのように受け止めていくのか。こういう問題が「化身土巻」の課題であろうというふうに思います。

■方便化身土の根本課題—濁世・末代の道俗—

そのはたらきに出遇っている自覚内容、これが実は一般に三願転入の文と呼ばれている内容だと思います。私はそれを「願海に入る」という言葉で表わしました。つまり如来の願いのなかにあるという、この自覚として受け止めるべきだと。つまり、私たちがただ念仏するということが、その実践的な意味は私たちが如来のはたらきのなかに自己を見いだすということです。そうすれば、私たちはその如来の言葉というものに本当に出遇っていく存在として、この世を歩むことができます。

この自覚を通して、初めて私たちは仏説というものに本当に依っていくということがはっきりするわけです。仏の教えに依るとはどういうことなのか。それは仏滅後のわれわれに遺教として示される「四依」という問題を押さえてくる。つまり濁世であって、しかも末代。お釈迦さまがいない時代を生きる存在として教えというものに出遇っていかねばならない。そこに初めて「教誡」という問題が出てきます。

「教誡」というのは、濁世をいたむお釈迦さまの慈悲によってさまざまな教えが説かれているのだ、ということをお返せよ、ということです。そういう課題として受け止めるならば、この「教誡」という言葉でなされてくるのは、人間性を見失わせるようなさまざまな事柄というものをどのようにお釈迦さまは受け止めようとしたのか。その精神に出遇うための課題なのです。



こういう大きな視点というものが示されたときに、現代において、私たちにおいて、仮なるものはどのようなかたちで私たちを縛っているのか。偽なるものはどのようなかたちで私たちを包んでいるのか。ひょっとすると、浄土真宗の言葉を語りながら、私たちは仮に取り込まれたり、偽のなかに埋没していたりするかもしれないわけです。そういう問題をお返すための具体的な道は「化身土巻」は非常に厳密に記述してこうとされているのだと思います。

※如来雄之氏の講義と質疑は、『現代と親鸞』第35号(2017年6月1日号)に掲載予定です。

●出版物のご紹介

◇第33号 特集 清沢満之研究の軌跡と展望 『現代と親鸞』(2016年6月1日)

巻頭論文

◆躍動する教学——現代に向かって清沢満之が投げかけた課題 …… 本多 弘之

第1部 清沢満之研究会の軌跡

◆満之の骨格——『宗教哲学骸骨』を中心に …… 田村 晃徳

◆他力門仏教に帰す——「他力門哲学骸骨試稿」の実存的意義 …… 伊東 恵深

◆『臘扇記』を読む——清沢満之における転換期 …… 名和 達宣

◆『有限無限録』を読む——「公」とは、「国家」とは …… 山本 伸裕

◆『精神界』論文』にみる清沢満之の応答性 …… 春近 敬

第2部 寄稿論文

◆西田幾多郎の「宗教哲学」と清沢満之の「宗教哲学」 …… 杉本 耕一

◆井上円了と清沢満之——近代日本の仏教者 …… 三浦 節夫

◆「天」と「公」と——清沢満之における「儒家的なもの」 …… 子安 宣邦

第3部 清沢研究の可能性～没後百周年から見えたもの～(第1回「清沢満之研究交流会」報告)

◆提言Ⅰ 清沢満之「復権」の試み …… 山本 伸裕

◆提言Ⅱ 天皇制国家と「精神主義」——清沢満之を中心に …… 近藤俊太郎

◆提言Ⅲ 清沢満之の〈発掘〉——『臘扇記』という一断面 …… 名和 達宣

◆提言Ⅳ 大谷大学編『清沢満之全集』編纂の背景と課題 …… 西本 祐攝

◆討議 異領域からの清沢研究が交わる場所 …… コメンテーター 杉本 耕一

第4部〔コラム〕清沢満之という多面体

Ⅰ 激切なる実学——近代日本最高の哲学者・清沢満之(越部良一)／Ⅱ 感電と摩擦——清沢満之と曾我量深(藤原 智)／Ⅲ 清沢満之を描いた画家——中村不折とその時代(大澤 絢子)／Ⅳ 悟後修行の風光——清沢満之と證空(中村玲太)／Ⅴ 大きな「自分」としての存在——鈴木大拙にとっての清沢満之(ステファン・P・グレイス)／Ⅵ 理性の限界と「不可知の実在」——清沢満之とスペンサー(長谷川琢哉)

第2回「清沢満之研究交流会」報告

清沢満之から問われるもの —異領域間の「対話」は可能か?—



清沢満之研究は、没後百周年（2003年）を機に大きく進展し、これまでに増して種々の立場から画期的な研究成果が発表されるとともに、新たな入射角からの問題提起がなされるに至った。しかし、それゆえに異領域間での「すれ違い」や「もつれ」が生じていることも、まぎれのない事実であろう。

そこで、それぞれの立場において、清沢の研究に取り組むことを自明の事柄とはせずに、あらためて「なぜ、清沢なのか？」を問い返し、そこにおいて逆に清沢から問われるもの、あるいは自らの立場や研究領域に開示される可能性について議論を重ねることを目指して、2016年3月17日「浩々洞発祥の地」として知られる求道会館（文京区本郷）を会場に、第2回「清沢満之研究交流会」を開催した。

当日は約60名が集い、研究領域や立場を越えての白熱した議論が繰り広げられた。以下、思想史学（繁田氏）・真宗教学（名畑氏）・宗教哲学（杉本氏）という三つの研究領域からの発表要旨と、全体討議におけるコメント（岩田氏）の一端を報告する。

研究発表

I 方法としての〈清沢満之〉の可能性 ——「悪」と近代への問い——

繁田 真爾（明星学園教諭〔早稲田大学〕）

近年、「清沢そのもの」の研究は精緻化する一方で、「なぜ清沢か？」という問いは、脇に置かれがちである。その結果、一部の人々には自明の清沢研究も、他の人々には問いを共有することすら難しい、そんな研究の自己目的化が進んでいる。しかし清沢は、「近代」を問うための最も可能性ある思想家の



浩々洞発祥の地・求道会館

一人だというのが、私の確信である。重要なのは、清沢思想の核心である「有限者の哲学」、「否定の方法」、「悪人の宗教」の歴史的意義を理解し、そこからどのように「近代」を逆照射することができるか、ということであろう。清沢研究の強みを最大限に活かすためには、逆説的だが、ある程度「清沢そのもの」から離れ、その「部分否定」や「悪」の思想などを手がかりに、「清沢からみた近代」を問い直す大きな視座に再び立つことが、重要ではないだろうか。

II 満之再誕——その歴史的意味——

名畑 直日兎（真宗大谷派教学研究員）

『宗教哲学骸骨』執筆の初期から、晩年にいたるまで、満之の中で貫かれていた課題は「宗教心」（安心立命）であることを、満之のテキストを元に確認したい。



真理に目覚めるところに宗教心が成り立つのだが、そこにはどこまでも目覚めることができないという根本問題（無明）が横たわっている。このことの論理化につとめた満之は、その根本問題の克服（「人生に関する思想の一変」）につとめた。

そのなかで、エピクテタスの不如意から、真理を知ろうとする我々の自我分別（「思想」、無明）を翻す意味を聞き取ったのである。その翻りはまた、他者・社会との関係を開く内容をもっていることを確認したい。「精神主義」は、学説ではなく実行であるとされるが、分別ではなく翻り（目覚め）をモットーとする満之の生き方、姿勢は現代の我々へのメッセージではないだろうか。

III

今村仁司の清沢満之論と「宗教哲学」の課題

杉本 耕一（愛媛大学准教授）

今村仁司の清沢満之論は、清沢研究に大きなインパクトを与えた業績であるにもかかわらず、「没後百周年」以降の清沢研究の展開のなかでも正面から取り上げられることが少なかった。

そこで本発表では、「宗教」の事柄をどのように語るか、という問題に論点を集中させて今村の清沢論を再検討したい。特に注目したいのは、直接には述べられていないことまでも概念の論理的な展開によって論を進めようとする「哲学」的な読解の方法、そして、「哲学」によって概念的に語るができないものを語るために「比喩」的な語りを用いる「仏陀学」の立場についてである。

今村に導かれつつ清沢の言葉の性格について考察し、その「宗教哲学」としての課題を明らかにすることで、異領域からの清沢研究の間の対話の可能性を準備することを目指す。



全体討議

異領域間の「対話」は可能か？

コメンテーター 岩田 文昭（大阪教育大学教授）

清沢満之研究の核になるものは、その「信心」であると思う。このことは、思想史・真宗教学・宗教哲学という異なる研究領域の対話の可能性を問題にする場合、議論が拡散しないために、押さえておく必要がある。

三人の発表者は、それぞれの手法で「信心」を問うていた。ただし、杉本氏は「信心」の内容ではなく、その語り方を主題にし、宗教哲学における方法論を論じているため、それ以外の学問との間に壁を作る印象を受ける。杉本氏の力量からすれば、たとえば武内義範先生がされたように「回心」について宗教哲学の立場から論じることがで



きるのではないだろうか。名畑氏の発表は、手堅いものであったが、やや抑制が効きすぎている感がある。今後は、より積極的に「信心」讃嘆の学を現代社会に展開していただければありがたい。繁田氏の発表は、その立場も「悪」を人間の現実態とする清沢理解も明晰で首肯できた。ただ、真宗学や宗教哲学の研究を参照されていないのはなぜだろうか。

清沢の思想は重要だが、彼の生き方はさらに重要だと思う。真宗の信心を近代的に語った清沢だが、その人生は神話化・物語化されている。今後、思想と物語としての人生をあわせて研究する必要があるのではないだろうか。

開催を終えて

企画・進行 名和 達宣（親鸞仏教センター研究員）

本交流会は、昨年、「現代との対話」に主眼をおく当センターの新たな試みとして立ち上がった（第1回のテーマは「清沢満之研究の〈可能性〉——没後百周年から見えたもの」）。今年度の第2回では、一足飛びに目新しいトピックへと移るのではなく、あえて“異領域間の「対話」は可能か？”という根本的な問いに立ち返り、これまでの研究の軌跡をたずねつつ、これからの方向性を模索した。

はたして、その「対話」の場所を、清沢研究という領域に——あるいは清沢研究をとおして——見いだすことはできるであろうか。そして、われわれが「異」と見なしているものの実態は何か。

本交流会が、今後も“敬意ある批判”をぶつけ合えるような場として継続していくことを期す。

※研究発表・全体討議の詳細は、『現代と親鸞』第35号（2017年6月1日発行予定）に掲載予定です。



全体討議の様子

い」という、釈尊と阿弥陀如来の声を聞くのです。「言阿弥陀仏者」とは「即是其行」だと言います。「即是其行」とは、この心が法蔵菩薩の「願い」にほかならない、ということです。私たち一人ひとりの個人的な願いではなく、法蔵によって行ぜられ、選り取られた願いの心です〔注1〕。私たちの心を底から破つて響いてくる、本當の願いの声を聞く。そこに確かに阿弥陀の世界が開かれているのだ、とおっしゃっているのです。「以斯義故」とは、阿弥陀の誓いにおいて間違いなく定まっているという、この意味によつてこそ、ということです。「必」は必ず、「得」は得させる、「往生」とは阿弥陀の世界に生まれる、ということとです。「必ず」とは、阿弥陀の世界に生まれさせるといふことが「自然に」である、ということです。「南無阿弥陀仏」において初めて、あれこれと思ひはからわずにはいられない私たちの生きざまが破られる。おのずからなる、如来の本願のはたらきなのです。

〔注1〕

・念仏を称えることなどまったく「行」とは言えないではないか（撰論家）、との批判に対し、善導は「阿弥陀仏」こそが行だと応えた。この言葉を親鸞は、法蔵の選択本願、阿弥陀の願力成就の内容として受け止めている。

原文

善導和尚の云わく、「言南無者 即是歸命 亦是發願回向之義 言阿弥陀 仏者 即是其行 以斯義故 必得往生」（玄義分）

「言南無者」というのは、すなわち歸命ともうすみことばなり。歸命はすなわち釈迦・弥陀の二尊の勅命にしたがいて、めしにかなうともうすことばなり。このゆえに「即是歸命」とのたまえり。「亦是發願回向之義」というのは、二尊のめしにしたがうて安樂浄土に生まれんとねがうところなりとのたまえるなり。「言阿弥陀仏者」ともうすは、「即是其行」となり。即是其行は、これすなわち法蔵菩薩の選択本願なりとするべしとなり。安養浄土の正定の業因なりとのたまえるところなり。「以斯義故」というのは、正定の因なる、

歸命したてまつりて、安樂国に生まれんと願す。（二二三頁「真仏土巻」「浄土論」）

◆發願回向／二尊のめしにしたがうて安樂浄土に生まれんとねがうところ

■至心回向したまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得、不退転に住せんと。（二二三頁「信巻」「大経」）

■「云何が回向したまえる。一切苦惱の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、回向を首として大悲心を成就することを得たまえるがゆえに」とのたまえり。回向に二種の相あり。一つには往相、二つには還相なり。往相は、己が功德をもつて一切衆生に回施したまいて、作願して共にかの阿弥陀如来の安樂浄土に往生せしめたまうなり。（二二三頁「信巻」「論註」）

■「弘願」と言うは、『大経』の説のごとし。一切善惡の凡夫、生を得るは、みな阿弥陀仏の大願業力に乗じて、増上縁とせざるはなしとなり。……仰ぎて惟みれば、釈迦はこの方にして發遣し、弥陀はすなわちかの国より來迎す。彼に喚ばい此に遣わす。あに去かざるべけんや。（二八三頁「証巻」「玄義分」）

如来の大悲心なるがゆえに、必ず報土の正定の因と成る。如来、苦惱の群生海を悲憐して、無碍廣大の淨信をもつて諸有海に回施したまえり。これを「利他真實の信心」と名づく。（二二八頁「信巻」）

◆必得往生／自然に往生を得しむ／はじめはからわざる

■「必得往生」と言うは、不退の位に至ることを獲ることを彰すなり。『経』（大経）には「即得」と言えり、『釈』（易行品）には「必定」と云えり。「即」の言は、願力を聞くに由つて、報土の真因決定する時刻の極促を光聞せるなり。「必」の言は、審（あきらかなり）なり、然なり、分極なり、金剛心成就の貌なり。（二七八頁「行巻」）

■「則」というのは、すなわちという、のりともうすことばなり。如来の本願を信じて一念するに、かならず、もとめざるに無上の功德をえしめ、しらざるに廣大の利益をうるなり。自然に、さまざまのさとりを、すなわちひろく法則なり。法則というは、はじめて行者のはからいにあらず。もとより不可思議の利益にあずかること、自然のありさまともうすことをしらしむるを、法則とはいふなり。（五三九頁「一念多念文意」）

「善導大師の銘文」(二)

善導二つ目の銘文は、「南無阿弥陀仏」についての釈である。ただし、それは単なる語義や解釈の羅列ではなく、そこからはむしろ、何とも言葉に尽くしがたいような、動き、がふれ出している。「南無」が「発願回向」で「阿弥陀仏」が「行」だという、この言葉自体は、私たちの思考の枠には収まらない。善導や親鸞において、受け取られた「南無阿弥陀仏」は常にそこを破り、動き続けているのだ。

常に動いてやむことがないとは、私たちの生活も同様だ。しかし、それはもつと利他的である。私たちの関心と欲求は、新しい獲物を目がけて次から次へと飛び回る。このありさまを、法然は一所に落ち着けない猿や馬に喩えた。どれだけ斬新で革新的な発見も、どれほどダイナミックな視座の転換も、それだけではひとつの「流れゆくもの」、「移ろいゆくもの」でしかない。まったく違う、新たなものを求めているようで、実は「自分」という関心の枠のなかからは一歩も出られていない。

精一杯手を伸ばした先にあるものは、今の自分に必要なものだろうか。「南無阿弥陀仏」の言葉は「称えよ」ではなく「聞け」と言つ。あれこれと口を開く前に、言葉が来るのを待たねばならない。
(元研究員 内記洸)

現代語

「言南無者」というのは、「帰命」という、本当に大切な言葉です。「帰命」とは、釈尊と阿弥陀如来からの呼びかけにしたがって、その願いそのままの心になる、という言葉です。私たちの思慮分別を超えた深い願いに、この身がすつかり翻される。ですから「即是帰命」だとおっしゃるのです。「亦是発願回向之義」とあるように、この「南無」はまた、阿弥陀の世界に生まれたいと願う心なのだ、とおっしゃいます。「本当に帰るべき世界に帰りなご

この義をもつてのゆえにといえる御こころなり。必はかならずという。得はえしむという。往生というは浄土にうまるといふなり。かならずというは、自然に往生をえしむとなり。自然というは、はじめてはからわざるこころなり。
(『真宗聖典』五二〇～五二二頁)

《参考》(ページはすべて『真宗聖典』)

◆南無／帰命／二尊の勅命に

したがいて：

■しかれば、「南無」の言は帰命なり。

「帰」の言は、至なり。また帰説「よりたのむなり」なり、説の字、悦の音、また帰説「よりかかるなり」なり、説の字は、税の音、悦税二つの音は告ぐるなり、述なり、人の意を宣述なり。「命」の言は、業なり、招引なり、使なり、教なり、道なり、信なり、計なり、召なり。ここをもつて、「帰命」は本願招喚の勅命なり。
(一七七頁「行巻」)

■それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり。この経の大意は、弥陀、誓いを超発して、広く法蔵を開きて、凡小を哀れみて、選びて功德の宝を施することをしたす。釈迦、世に興して、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり。
(二五二頁「教巻」)

■世尊、我一心に尽十方の無碍光如来に

◆即是其行／法蔵菩薩の選択本願／安養浄土の正定の業因

■「発願回向」と言うは、如来すでに発願して、衆生の行を回施したまうの心なり。「即是其行」と言うは、すなわち選択本願これなり。
(一七七～一七八頁「行巻」)

■正定の業とは、すなわちこれ仏の名を称するなり。称名は必ず生まるることを得、仏の本願に依るがゆえに、と。
(一八九頁 同「選択集」)

■一切凡小、一切時の中に、貪愛の心常によく善心を汚し、瞋憎の心常によく法財を焼く。急作急修して頭燃を灸うがごとくすれども、すべて「雑毒・雑修の善」と名づく。また「虚仮・諂偽の行」と名づく。「真実の業」と名づけざるなり。この虚仮・雑毒の善をもつて、無量光明土に生まれんと欲する、これ必ず不可なり。何をもつてのゆえに、正しく如来、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修、乃至一念・一刹那も疑蓋雜わるることなきに由つてなり。この心はすなわち

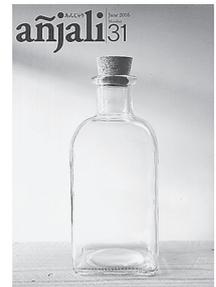
● 親鸞仏教センターが移転しました。



- 都営地下鉄大江戸線「本郷三丁目」駅
5番出口から徒歩7分
- 東京メトロ丸の内線「本郷三丁目」駅
2番出口から徒歩8分
- 東京メトロ千代田線「湯島」駅
5番出口から徒歩7分

● 『アンジャリ』第31号刊行 (2016年6月1日)

- 山極寿一／「人間社会の由来と未来」
- 鈴木範久／「内村鑑三と『安心決定鈔』」
- クリス・バージェス／「国際化、多文化共生、または日本の「開国」ジレンマ」
- 入不二基義／「哲学的なレスリング、レスリング的な哲学」
- 大熊 玄／「「哲学の博物館」という矛盾」
- 石川九楊／「親鸞の書—その逆接と逆説」
- 櫻井義秀／「カルトからの回復—レジリアンスをてがかりに」
- 下園壮太／「「必ず乗り越えられる」という言葉の力」
- 今村純子／「「見ること」から「創ること」へ—映画『Peace』をめぐる」



● リレーコラム

「近代教学の足跡を尋ねて」第7回 (鎌倉市稲村ヶ崎・寸心荘)

JR 鎌倉駅から江ノ電に乗って五つ目に「稲村ヶ崎」という駅がある。映画「稲村ジェーン」(桑田佳祐監督、1990年)の舞台になるなど、いわゆる“波乗り”の聖地として知られる街であるが、太平洋戦争の終戦間際、日本の思想史上に大きな波を起こした人物が、この場所で命を終えていった。

——西田幾多郎。「哲学者」としての生涯を生き抜いた人物であるが、若き頃には清沢満之や浩々洞三羽鳥から多大な影響を受けるなど、近代真宗教学との関係も無視することはできない。その西田は晩年、この街に別邸をかまえ、論文の執筆に励んだ(現在は学校法人学習院が管理、通称「寸心荘」)。なかでも親友・鈴木大拙との対話や『教行信証』の読書を重ねながら著した最後の完成論文は、親鸞に深い共鳴を示した宗教論であった。その名を「場所的論理と宗教的世界観」という。

海をこよなく愛した西田は、そこに「何か無限なものが動いている」と詠じた。生前、書斎机は鎌倉の海の方角に向けられていたと伝わる。

(名和)



学習院西田幾多郎博士記念館(寸心荘)

● 行事日程のご案内

■ 親鸞思想の解明

- 日 時：2016年6月9日(木) 18時30分～20時30分
7月22日(金) 18時30分～20時30分
8月25日(木) 18時30分～20時30分
会 場：東京国際フォーラム ガラス棟(G棟)

■ ご命日のつどい(毎月第2金曜日)

- 日 時：2016年6月10日(金) 10時～11時30分
7月8日(金) 10時～11時30分
8月12日(金) 10時～11時30分
会 場：親鸞仏教センター仏間(新施設)

上記共に、事前申込み不要・無料です。

● センター新スタッフの紹介

研究員 あお やぎ えい し
青柳 英司

1985年栃木県生まれ。
大谷大学文学部真宗学科卒業。大谷大学大学院文学研究科修士課程修了。同研究科博士後期課程修了(真宗学)。博士(文学)。元大谷大学任期制助教。専門は、親鸞聖人、善導大師の思想研究。

研究員 は せ が わ た く や
長谷川 琢哉

1975年新潟県生まれ。
大谷大学文学部哲学科卒業。大谷大学大学院文学研究科修士課程修了。京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学(宗教学)。元大谷大学任期制助教。元大谷大学非常勤講師。元龍谷大学非常勤講師。元光華女子大学非常勤講師、等。専門は、井上円了、清沢満之を中心とした近代仏教哲学。